情動知能 (EQ) はプレゼンテーションの資質となり得るか？

○ チャールズ・プリブル, ジェームズ・キートン (非会員), 坂本正裕
(大妻女子大学) (北コロラド大学, U. S. A.) (文京学院大学)

Key words: EQ, 状態不安, プレゼンテーション・スキル

目 的

情動知能 (EQ) は、様々な仕事や技能の能力に関係している」と主張されてきたが、実証的な研究は日本では非常に少ない。島井、大竹、宇津木 (2007) は、女子大学生の就職活動では、高い EQ (特に対人対応) を持つ学生が成功しやすいことを明らかにし、情動知能は企業の採用基準になりうることを示唆した。一方、米国とは比較にならないが、日本においてもプレゼンテーション能力が教育場面や企業で重要視され始めた。プレゼンテーションに不安が高い場合には、自分の持つプレゼンテーション能力を十分に発揮できないことは自明の理と思われる。しかしながら、本人が非常に高い不安を訴えながらも、現実には見事なプレゼンテーションを行っていることがたびたび見受けられる。その理由として、情動知能が高い場合、感情制御や自己認知に長けており、プレゼンテーションに対する不安に巻き込まれず、自己の持つ能力を十分に発揮できると考えられる。そこで本研究では、実際のプレゼンテーションの授業において、情動知能と不安がプレゼンテーションにどのような影響を持つかを調べた。

方 法

実験参加者 女子大学生 34 名。大学カリキュラムの一環として、下級学年は 13 のクラスにランダムに割り当てられ、プレゼンテーション・スキルがこのクラスのテーマであった。**手続き** 授業の最初にガイダンスがあり、次の週に各学生は、プレゼンテーション直前にトピックを言い渡され、クラス全員の前でそのトピックについて、プレゼンテーションを行うことを求められた。そのトピックは本人には予告しておらず、ランダムに割り当てられた。プレゼンテーション終了後、各自に STAI が配布され、プレゼンテーション時の感情を思い出して記入するように教示し、次に EQS を試行した。STAI と EQ はその場で回収され、封印が施されて、最終成績が出るまで、開封されなかった。プレゼンテーション訓練は Pribyl, Keaten, & Sakamoto (2001) および教則本 Contemporary Presentation Methods (2004) に従った。すなわち、学生は、何か新しいものを紹介する、説明、説得を目的としたプレゼンテーションを日本語で 3 回行った。各プレゼンテーションの前にはそのプレゼンテーションに必要なスキルを学ばせた。

結 果

EQS, STAI およびプレゼンテーションスコアの間には相関は見いだせなかった。

図1 プレゼンテーションごとのクラス全体の成績平均値

次に、状態不安、情動知能、プレゼンテーション能力間の関係を明らかにするために、3 回のプレゼンテーションスコアを被験者内要因として、被験者間要因としては状態不安 (高群、低群) と情動知能 (高群、低群) を設けて、一般線型モデル (GLM 反復測定) を用いて分析を行った。多変量検定の結果、プレゼンテーション能力は 3 回のプレゼンテーションにおいて異なることが示された ($\lambda = .726, F(2, 29) = 5.46, p < .05, \eta^2 = .274$) (図 1)。すなわち、学生の 2, 3 回目のプレゼンテーションスコアの平均値は、1 回目比べて有意に高くなっていることが明らかになった。

周辺平均の群間の効果を調べてみると、2 要因間に有意な交互作用が見いだされた (図 2) すなわち、情動知能と状態不安は相互に作用しあってプレゼンテーションスコアに影響を与えていた ($F(1, 30) = 6.68, p < .02, \eta^2 = .18$)。

図2 EQと状態不安がプレゼンテーションスコアに及ぼす影響

特に、本人の情動知能のレベルが高い場合、状態不安が高いと報告した学生は、有意に高いプレゼンテーションスコアを示した。一方、状態不安が高く、情動知能の低い学生は 4 条件の中で最もプレゼンテーションスコアが低かった。状態不安が低い学生たちに関しては、情動知能の高低によるプレゼンテーションスコアの差はなかった。

考 察

最初のプレゼンテーションに比べて、後続するプレゼンテーションのスコアが高くなることは、プレゼンテーション・スキルの授業を受けることが概してプレゼンテーション能力を高める効果があることを示唆している。一方で、情動知能の高低と状態不安の高低はプレゼンテーションスコアに対して交互作用があり、状態不安とプレゼンテーションの間に情動知能が介在する可能性が示唆された。情動知能の高い学生は、プレゼンテーション場面での不安感情を制御し、さらにその感情をより高いパフォーマンスに変換できることが示された。これは情動を認知活動に利用するという情動知能の働きに合致するといえよう (Mayer & Salovey, 1997)。逆に、情動知能が低い場合は、プレゼンテーション場面に対する不安の高さが、認知的処理のリソースを狭め、パフォーマンスを大きく阻害することが示された。以上のことから、不安感情を惹起するようなストレス事態に置かれたとき、情動知能がその機能的役割を発揮する可能性が示唆された。

(Charles PRIBYL, James KEATEN, Masahiro SAKAMOTO)